

大学一般教育としての情報教育の機能と学生ニーズ

大阪大学大学院助教授 田中規久雄

はじめに

大学設置基準(文科省令)は、「教育課程の編成に当たっては、大学は、学部等の専攻に係る専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない。」(19条2項)と定めている。

本報告では、原則として設置基準にある、学部学科といった専門に関係のない、「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培う」ための、一般教育科目としての大学「情報教育」の内、特に従来「リテラシー科目」と呼ばれていた入門科目について検討するものである。

1. 大学一般教育の現実的機能

この「教養」あるいは「判断力」を育成する教育は一般にリベラルアーツと呼ばれる。各大学はこの実現のため、いわゆる一般教育科目、共通教育科目、教養科目といわれるものを設置しているが、まずはその機能を確かめる必要がある。

(1)「概論科目」: 各専門の学問が何を問題にし、何に取り組んでいるのか、その成果の概要やトピックなどを他分野の学生の教養とする科目。例)情報科学概論などといった 学概論、テーマ別科目、総合科目...

(2)「学習スキル向上科目」: 高校までのスキルをさらに向上させ、学習の基礎力とする科目。例)英語、体育...

(3)「学習スキル開発科目」: 大学での新しい学習方法を学ぶ科目。例)第二外国語、基礎ゼミ、資料読解法、文献検索、レポートライティング、スタディスキルズ...

(4)「専門基礎科目」: 専門科目に直結する基礎科目。例)理系数学、経済数学、図学、統計学...。(これは純粋な意味ではリベラルアーツとは呼び難いが、歴史的にそう扱われてきている。)

2. 高校「情報」に対応した大学一般情報教育

高等学校教科情報は次の「4本柱」からなる。

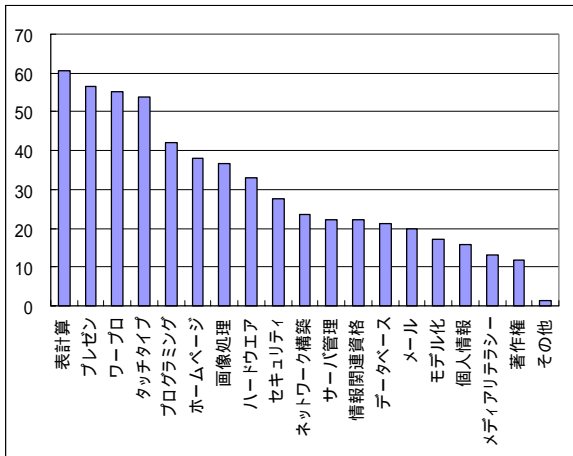
- (1)「情報活用」: 情報活用の実践力
- (2)「情報科学」: 情報の科学的理解
- (3)「情報社会」: 情報社会に参画する態度
これにそれぞれのベースとなる、
- (4)「機器操作」: コンピュータや情報通信ネットワークなどを活用した実習
が加わる。

これらを、先述の大学リベラルアーツの機能(スコープ)にあてはめると、以下ようになる。

リベラルアーツの系譜 ()内は他科目の例	一般情報教育科目
概論科目 (政治学概論...)	「情報科学」科目群 「情報社会」科目群
学習スキル向上科目 (英語、体育...)	「機器操作」科目群
学習スキル開発科目 (第二外国語...)	「情報活用」科目群
専門基礎科目 (図学、統計学...)	専門別「情報活用」

3. 情報リテラシー科目に対する学生ニーズ

(1) コンピュータ利用教育協議会(CIEC)の2006年度大学新入生約7600名対象調査。



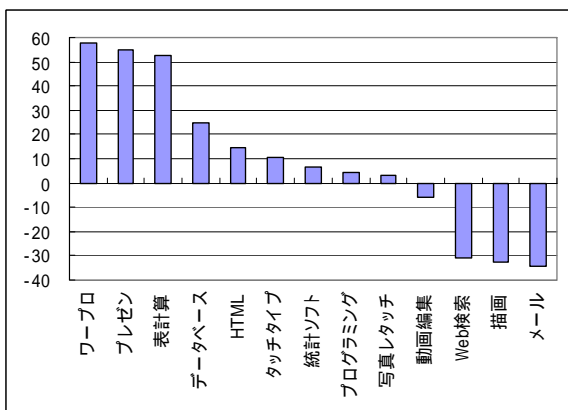
(2)大阪大学法学部調査 (2006年7月)

大阪大学共通教育の情報リテラシー科目「情報活用基礎」(法学部対象)の受講生160名を対象に、この科目の終了直前に、「すべての新生が、この授業のレベルのスキルをもっているとした場合でも、(1)この科目は必要か、あるいは不要か、(2)必修ではなく自由選択科目として存続させる場合、どのような内容が必要か不要か。」について調査した。なおこの科目は、ワープロ、表計算、プレゼンの入門から中級手前まで程度の内容である。

	必要	どちらでもいい	不要
%	51.3	34.4	14.4

半数以上の学生がこの科目は「必要」と答えた。理由は30数名が、「入学時にすでに初級スキルがあったとしても」「忘れてしまう。定着のため。」をあげている。すなわち「学習スキル向上科目」としての学習機会を求めている。

各内容について、「必要とする学生数 - 不要とする学生数」を%で表す。一種の選挙である。



4. 情報処理からアカデミックリテラシーへ

以上のことから、「情報リテラシー」科目は、「図書館活用」、「資料検索」、「統計」、「レポートライティング」などと合体してアカデミックリテラシー(筑捷彦「情報基礎演習とその展開」<http://www.decode.waseda.ac.jp/sympo2006/>参照)科目となるのが本来の筋で、実は本質的には「情報(処理)教育」科目ではないのである。現在の議論を見ていると、そこが混乱しており、あくまで情報(処理)教育の枠内でリテラシー科目を取扱おうとするところに様々な矛盾や綻びが見えるように思える。その誤謬の典型例が、コンピュータが関わっているからということだけで、「情報リテラシー」科目を情報科学のサブセットとして捉えてしまう見方であって、それは本質的に科目の性質を見誤っているものと思われる。

そうした視点から見ると、高校でいう「情報活用」と「機器操作」を統合した科目がリテラシー科目にふさわしいであろう。ただし、ある程度高度なテーマを取り上げ、それについて様々なツールを用いて表現するという方法をとらなければ、アカデミックリテラシー育成ではなく、単なる操作教育の感はぬぐえないものと思われる。

たとえば、ある程度高度なテーマを取り上げ、そのテーマについて、統計データなどを表計算で処理させ、その結果の表やグラフ、また海外の文献なども用いた論文をワープロで書かせ、またプレゼンテーションさせるというのはどうだろうか。ワープロ、表計算、プレゼンテーションのそれぞれに別々の材料を用いるとどうしても操作教育の感がぬぐえなくなるが、一つのテーマについて様々なツールを用いて表現するという方法をとれば、高等教育にふさわしい「情報活用」教育が可能になるのではないだろうか。

[参考文献]

拙稿「高等学校教科『情報』に対応する大学情報リテラシー科目内容の検討」信学技報v106, n249.